



(徳島)

# 徳島・徳島城下町跡

とくしまじょうかまち

- 1 所在地 一 徳島市中徳島町、二 徳島市中前川町
- 2 調査期間 一 二〇〇〇年調査 二〇〇〇年(平12)五月～九月

九月

二二〇〇二年調査 二〇〇二年五月～一〇月

- 3 発掘機関 徳島市教育委員会
- 4 調査担当者 勝浦康守
- 5 遺跡の種類 城下町跡
- 6 遺跡の年代 中世～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

徳島城下町は天正一三年(一五八五)、蜂須賀氏の阿波入府後、徳島城の建設とともに整備が進められた。旧吉野川下流域の河成堆積により形成された六つの島状の低位沖積地を基盤にした島普請に特徴がある。

一二〇〇〇年調査

調査地は徳島城が構えられた島「徳島」に位置し、徳島藩土寺澤家(三五〇〇石、後五三三石)の屋敷にあたる。調査では瓦や陶磁器を廃棄した土坑、井戸、池を確認している。池は調査地外に広がり全形は明らかではないが、結晶片岩の石組で護岸しており、板状に加工した石材を使用した階段部が設けられる。木簡は、池の底部に堆積した層厚二〇cmの植物質・炭を含む水成堆積層から四点出土した。その他の出土遺物には、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、瀬戸美濃系陶器、漆器碗があり、一八世紀前半に投棄されたものと考えられる。

## 二二〇〇二年調査

調査地は徳島城の北側、助任川左岸の武家地である「助任前川」に位置し、安政年間(一八五四～一八六〇)に描かれた御山下島分絵図「助任前川」では、徳島藩士の森田家(三一五石)、福屋家(二〇〇石)、三澤家(三〇〇石)の屋敷地にまたがっていることがわかる。ただし、天明年間(一七八一～一七八九)に描かれた絵図には森田・三澤の記載がみられないことから、この間に屋敷替えが行なわれていることがわかる。

調査では屋敷界溝、井戸、土坑を検出している。木簡は屋敷地の境界に設けられた溝SD一一から一点、福屋家屋敷内の土坑SK八七から一点、SK三一から五点出土した。溝SD一一は屋敷界溝であり、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器が出土し、一七世紀後半に人

為的に埋め戻される。また、土坑SK八七・三一は廃棄土坑であり、肥前系陶磁器、京・信楽系陶器、瀬戸美濃系陶磁器が出土している。SK八七が一八世紀中葉、SK三一が一九世紀後半・幕末の遺構と考えられる。

## 8 木簡の釈文・内容

### 一 二〇〇〇年調査

- (1) 「御奥様へ 岩□十兵衛  
内」  
209×29×1 051

- (2) 「  
寺澤主馬様 久米六郎兵衛  
江口弥五右衛門」  
168×41×6 032

- (3) 「  
松茸五拾本入  
」  
167×23×1 033

- (4) 「  
御内カ  
大根  
」  
大根□□本  
212×23×1 011

(1) (4)は荷札木簡であり、(2)は寺澤家五代寺澤主馬に対し、徳島藩士久米六郎兵衛と江口弥五右衛門が連名で、松茸五〇本を送る際

に使用したものである。久米六郎兵衛は久米家(二五〇石)五代、江口弥五右衛門は江口家(二〇〇石)三代である。二人の共通点は洲本本ノ役に就いていることであり、洲本城下(淡路)の特産品である松茸を、寺澤主馬に季節の贈答品として送ったものである。年紀はないが、江口弥五右衛門(二七二―一七三五)の存命が短期間であるので、遺構・遺物の年代観を絞る点において有効である。(4)は送り荷が大根である。徳島藩は地方知行を採用しているが、年貢米だけではなく、大根のような野菜類も所領地から送られていることを示す。

### 二 二〇〇二年調査

#### 溝SD一

- (1) 「伊カ  
兵衛分」  
122×24×3 033

- (2) 宝 永×××  
「奉修大峯柴燈護摩供息(災  
梵字)」  
(370)×50×5 061

#### 土坑SK八七



二(2)

土坑SK三

(3) ・「V。米五斗」

・「V。米五斗」

124×24×5 033

(4) ・「米五斗」

・「米五斗」

(94)×(28)×3 081

(5) ・「竹力古力」

・「竹力古力」

101×23×4 011

(6) ・「逃谷力」

・「逃谷力」

・「逃谷力」

(103)×23×5 019

(7)

「竹力古力」

58×(95)×11 081

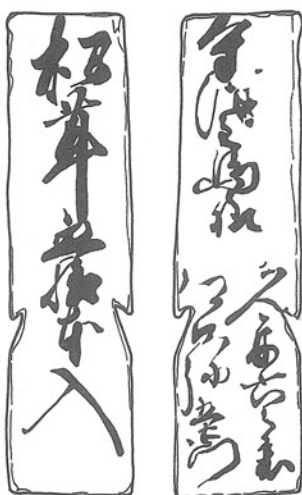
(2)は護摩札である。宝永(一七〇四―一七一)の年号が記されていることから、出土遺物の編年上、年代を限定する有効な資料である。(3)(4)は荷札木簡である。米五斗と記されていることから、福屋家の所領地から年貢米として送られたことを示すものである。徳島では明治初期まで五斗(一俵Ⅱ六〇kg)が基本単位とされた。これらの木簡は、近世徳島の武家社会における物資の流通の様子を窺い知ることができる貴重な資料である。

なお、木簡の釈読にあたっては、徳島市立徳島城博物館の根津寿夫氏にご教示いただいた。

(勝浦康守)



一(4)



一(2)



一(1)



二(4)



一(3)



二(3)表



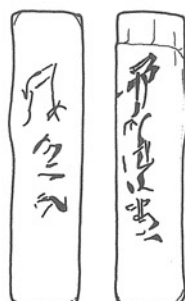
二(1)表



二(7)



二(6)



二(5)